

カミル・ホフマンの『政治日記』
——詩作する外交官が見た1933年のベルリン——

Das „Politische Tagebuch“ von Camill Hoffmann:
Betrachtungen eines dichtenden Diplomaten zur
Situation in Berlin 1933

浅野 洋

ASANO Hiroshi

カミル・ホフマンの『政治日記』
——詩作する外交官が見た1933年のベルリン——

Das „Politische Tagebuch“ von Camill Hoffmann:
Betrachtungen eines dichtenden Diplomaten zur
Situation in Berlin 1933

浅野 洋

ASANO Hiroshi

Resümee : Camill Hoffmann, der 1878 in Kolín nad Labem (Köln an der Elbe) geboren und in Auschwitz von den Nazis ermordet wurde, gehörte zu den vergessenen Prager deutsch-jüdischen Schriftstellern. Sein aus dem Nachlass veröffentlichtes „Politisches Tagebuch“, das er von 1932 bis 1939 während seiner Tätigkeit als tschechoslowakischer Diplomat in Berlin führte, besteht aus detaillierten Beobachtungen sowie Beurteilungen der spezifischen Situation in Berlin 1933. Als Diplomat der tschechischen Gesandtschaft beschreibt Camill Hoffmann nicht nur die politischen Ereignissen des aufkommenden Faschismus, sondern auch die binationalen Beziehungen zwischen der Prager Regierung und Nazi-Deutschland. Anhand dieses Tagebuchs können seine Rolle als Vermittler sowie seine Rettungsversuche tschechischer und deutscher Künstler und Dichter detailliert, analysiert und beurteilt werden.

キーワード：プラハのドイツ語文学、第一次チェコスロヴァキア共和国、ベルリン、ナチス、第三帝国、翻訳

I. はじめに

ユダヤ人のドイツ語作家カミル・ホフマンは、中部ボヘミアのコリーンに1878年に生まれ、同

時代のルードルフ・フックス、オット・ピックとおなじく、作家、詩人、そして翻訳家として、チェコの作家、詩人をドイツ語に翻訳し、ドイツ語圏でのチェコの作家の文学活動に道を切り拓いた。ロマンティックな叙情詩人であり文学史において無名のままであり、ドイツ語作家として不当にも忘れられた作家として遇されてきたカミル・ホフマンであったが、ユルゲン・ゼルケの『ボヘミアの村々』¹で紹介され、またその後にゼルケによるプラハでのシンポジウムで紹介され、これまでのプラハのドイツ語作家、パーヴェルの言う「三重のゲッター」という概念には収まらない実像が浮かび上がってきた。

このようにカミル・ホフマンは、これまで背景に退いていた黒子的な存在、チェコ、ドイツの文化の懸け橋的な存在として見なされてきたが、それを裏付けるように、ウィーン時代に編集した『 Grillparzer 以来のオーストリアの抒情詩』の序で次のように書いている。「まだら模様
の国家。人種が衝突する帝国。厳しいせめぎ合いを緩和するのが、歴史の使命ではないか。際
立った多彩さを融和させて溶かすことではないか。境界の民族はその血を混淆する。政治的な戦
いでは彼らの矛盾がきびしく出現するが、人知れず融和が起こる。あらゆる民族意識を取り去り、
血の混淆の神秘的な永遠の法則が支配している」。²ここにカミル・ホフマンの国家観、多民族の
共生の理念が凝集されているわけであり、言語、文学においてもその原型となる考え方は変わる
ことはなかった。「文学に国境は存在しなかった。言語が結びつけたものが、唯一の精神的な帝
国を形成した。(略) 古典主義、ロマン派、模倣主義、自然主義、印象主義、これらは単なる反
響ではなく、完全なる共同体験であった」。³「カミル・ホフマンがウィーンで明白となった崩壊現
象から守ったのは、内面の力がある青年期の風景であった。内面の力は生活のあらゆる困窮に立
ち向かう抵抗力をさずけた。抒情詩によって独特の内面性を客体化することに成功したことで、
かれの詩にはボヘミアの地誌がくりかえし登場し、チェコの生活が影響していた。ホフマンはド
イツ文学の世界と一体化し、詩をドイツ語で書くと同時に苦もなく原典を読み、20世紀に繁栄し
たチェコ文学を熟知していた」。⁴ドイツ・オーストリアの芸術のありようについても、新しい人
種も古い人種も混じった同じ血統によって、『血の混淆』によって高貴な芸術がもたらされると

-
- 1 Jürgen Serke: *Böhmische Dörfer — Die Wanderungen durch eine verlassene literarische Landschaft*, Wien, 1987.
 - 2 *Deutsche Lyrik aus Österreich seit Grillparzer*, ausgewählt und eingeleitet von Camill Hoffmann, Berlin, 1912, S. IV.
 - 3 Ebd., S. XI.
 - 4 Jürgen Serke, ebd., S. 219f.

明言する。⁵また、マサリクの多民族の共生の理念を具現化したのがカミル・ホフマンであった。その点を指摘してユルゲン・ゼルケはこう述べる。「カミル・ホフマンは、マサリクのあの国家理念の化身であり、この理念にはスラヴ人、ドイツ人、ユダヤ人のあいだで努力を重ねた共生のあり方が表明されていた。ホフマンは田舎の環境でチェコの御者たちのもとで育った」。⁶

この視点に立って、カミル・ホフマンの『政治日記』を読み直すことで、とくに30年代の政治的な大転換の時期にナチスの前夜から誕生までの時期、ナチス政権期に多くの詩人、作家、政治家と遭遇し、その交流を通じて政治状況の底部、深部を透徹した目で観察した記録であることが判ってくる。また2016年には、ポジェブラディ出身のルードルフ・フックス、フランツ・ヤノヴィッツ、ハンス・ヤノヴィッツ、ならびにコリーン出身のカミル・ホフマンの選詩集⁷（非売品）がポジェブラディ市によって編纂されたことから、プラハのドイツ語作家という固定した枠組みのなかで捉えられてきた実像に再検討を加える時期が来ている。

II. 『政治日記』⁸から見るベルリン時代

カミル・ホフマンの『政治日記』は彼自身が体験した現実の政治的な事件、日常の記録、とくに外交上の見聞録となっている。1918年に第一次チェコスロヴァキア共和国が誕生し、トマーシュ・マサリクが大統領に就任、外務大臣にベネシュが就任したが、カミル・ホフマンは、ヴラスティミル・トゥサル（1920年-24年）、カミル・クロフタ（1925年-1927年）、フランティシェク・シャルコフスキー（1927年-32年）、ヴォイチェフ・マストニー（1932年-39年）の四代にわたる大使のもとで18年間仕えたことになる。数年で職務を交代するのが常であったことを考えると、異常に長い勤務期間であったと言えよう。それだけ、とくにトマーシュ・マサリクの信頼が厚かったことの証左でもある。日常を仔細に記録すると同時に、ナチスが政権を奪取するまでの過程、

5 Deutsche Lyrik aus Österreich seit Grillparzer, ausgewählt und eingeleitet von Camill Hoffmann, Berlin, 1912, S. VI f.

6 Jürgen Serke, ebd., S. 219.

7 Rovinám rodným náleží písně mé..., Výbor z tvorby polabských židovských básníků – Camill Hoffmann, Franz Janowitz, Hans Janowitz, Rudolf Fuchs, herausgegeben von Lenka Kusáková, 2016.

8 Camill Hoffmann: Politisches Tagebuch 1932-1939, herausgegeben und dokumentiert von Dieter Sudhoff, Klagenfurt, 1955.

選挙戦の戦い方などを批判的に距離をとった客観記述に徹した姿勢が特徴となっている。そして最後に、マストニー大使とともに立ち会った1939年9月30日のミュンヘン協定の結果、11月30日に辞任したエドゥアルド・ベネシュ大統領の後継となったエーミール・ハーハによってカミル・ホフマンは職を解かれ、プラハに帰還することになる。

カミル・ホフマンの『政治日記』は、ナチスがチェコスロヴァキアを侵攻する1939年まで続いたが、ナチスがズデーテン地方の併合、残りのボヘミア、モラビアへの侵攻を始めた1939年3月15日の日記はこのように始まる。「夜、ヒトラーに助言してもドイツ軍の進駐は防げなかった。昨夜、モラビアのオストラヴァとフリーデクを占領（略）今日はボヘミア、モラビア全域の占領。チェコスロヴァキア共和国の終焉。朝、ラジオはすでに告げている、ドイツ軍は全方位から侵入し、10日から11日にかけてメルニク（ムニエルニーク）から機械化された軍隊が最初にプラハの傷痍軍人広場に到着した、すぐに他の部隊も。乗り物、タンク、重火器、野戦炊事車、通りは人で埋め尽くされている。この日はどんより暗く、霧が出て、風が吹いた。通りは凍結。進駐は暴力の遂行である」。3月15日は、第三代大統領となったエミール・ハーハが、パーメン・モラビア保護領の初代大統領になった日でもあった。⁹このようにボヘミア、プラハでのドイツ軍の侵攻を記しながら、この記録は終えていくのであるが、以下に1933年1月のナチス政権の誕生から始まる激動の日々を、『政治日記』をもとに辿ってみる。

ヒトラーはヒンデンブルクから帝国首相に任命されるが、カミル・ホフマンはナチス党が1932年11月の選挙の結果で、第一党とはいえ33パーセントの得票率であることから、基盤が脆弱であることを見抜き、急造内閣の不安定ぶりを次のように見る。「ヒトラー、今日の午前、ドイツ国首相に任命される。¹⁰（略）ヒトラーはすでにベルリンに滞在。彼がフーゲンベルク、パーペンとともに入閣できるとはだれも信じようとしな。というのはヒトラーはふたりとはとことん戦ってきたからだ。彼も最後の瞬間まで拒否したようだ。だが、今晚（略）急造の内閣はできた。

（略）つまり、ヒトラーの名前は冠しているが、国民社会主義（ナチス）の政権ではなく、革命的な政権でもない」。〔1933年1月30日〕脆弱な支持基盤を打開すべくヒトラーは議会を解散して、選挙に勝つべく、反ユダヤ人、反マルクス主義の路線を明確にする。「国会が解散。（略）彼らをついにまとめていのは、愛国主義である。『マルクス主義』に対する敵意が、ヒトラーの訴えのなかで多くのスペースを占める。期待されているは共産党の禁止であるが、それは選挙

9 Ebd., S. 253.

10 Ebd., S. 73f.

後のことであり、禁止によっていわゆる共産党の議席を没収できるようにするのである……」
(1933年2月2日)¹¹

国会放火の当日の日記は以下のように記され、とくに重要なのは、選挙の結果をへて暴動が起きるという予測であり、ナチスが選挙の勝利に向けて血道をあげていることが伝わる記述である。しかも重要なことは、ヒトラーの政権内部が一枚岩でないことがここでも指摘されている。

「昨日、拙宅で夕食。デーブリン、ヘーグナー、レオポルト・ウルシュタイン。(略) 会話のすべてが政治である。SAによるベルリンの選挙が予測されている。選挙後、夜間になんらかの暴動があるだろう。ヒトラーの政党が権力をもっているので、なんのための暴動か。ヒンデンブルク、パーペナーフゲンブルクを排除し、国民社会主義(ナチス)の独裁を宣言するため、と言われている」。(2月27日)¹²そして、2月27日の夜11時ごろに起きた国会の火災についてはこのように記述する。「昨晚、帝国議会の火災。私も、むろん11時になって向かってみた。すでに多くの民衆があたり全域にいた。建物は(略)消防車に囲まれ、警察に包囲され、静まり返り、沈鬱な人びとに囲まれていた。(略) ガラスの丸屋根の搭の部分に低く炎がゆらめいているのが見えた。国会議事堂の窓は明るく灯り、火事の灼熱によってではなく、いままさに明かりに照らされているようであった。湧きあがる好奇心からひどい炎の海、広がる炎を予想する者は、幻滅するにちがいない。晩に私が思ったのは、屋根裏の火災であり、寒い日の暖めすぎによる事故であろうということだ。暗殺ではないかという疑いが頭に浮かんだが、消えた」。(2月28日)¹³火災の発生した当初は、放火とは知らされず、事故とみなしていた民衆と同様の感想を抱いていたカミル・ホフマンは、火災の衝撃、そして放火犯が逮捕されるという一連の報道を知ることになるが、チェコスロヴァキア大使館の情報収集の任務がここでも紹介されている。すでに火災の翌日には、放火犯が自白し、ナチスのプロパガンダの通りに事態は進むことになると、カミル・ホフマンはこの段階で予測している。「帰宅してみると、マストニーはすでに電話で情報を収集したという。翌朝、なんとという衝撃だ！すさまじい火災と報道されている。本会議場は完全に焼け落ち、ひどく荒廃し、あきらかな放火であり、20箇所以上に及ぶ痕跡があり、オランダの共産党員、ファン・デア・ルッベが逮捕された。彼は、犯行を『自白』し、単独で行ったと主張し、社会民主党員と関係していたという」。(2月28日)¹⁴さらにナチスは一斉に共産党員の逮捕に踏み

11 Ebd., S. 74.

12 Ebd., S. 81.

13 Ebd., S. 81.

14 Ebd., S. 81.

切り、反ファシズムの作家の拘束、逮捕が続いた。大使館員カミル・ホフマンにとっては、彼自身がベルリンを去るまで、作家たちの救済が大きな責務となっていく。「途方もないパニック。政府は、夜にも『前進』の建物を占拠し、新聞を押収しさらに早朝、とうぜん建物からふたたび全部取り出した。政府は朝から、共産党の国会議員、弁護士、作家を逮捕したが、そのなかにはE・E・キッシュ、エーリヒ・ミュザーム、ルートヴィヒ・レン、レーマン・ルースビュルト、オシエツキーがいた。共産主義者への脅迫行為を貫徹するために利用したことは明らかだ。ゲーリングの素早い動きを感じる。おしなべて新聞の主張は、放火はボルシェヴィキ革命の幕開けであり、公的な建物や個人に対する一連のテロ行為であるとしている」。(2月28日)¹⁵

さらに事態が急速に展開し、大統領の緊急指令が合法的に出され、戒厳令、逮捕と続き、選挙を前にしてナチスの独裁国家が進行していることが深刻に記される。この段階でナチスへのジャーナリズムの支援も明らかになっていることも重要な指摘である。「夕方には、ドイツを戒厳令下に置く大統領の新たな緊急命令が出されるだろう。市民の自由の終焉！朝刊が出てから、これまで決してなかった独裁の演出がある、と私は信じている。すべては演出である。明らかに放火もそうだ。(略)だが外国は面を食らっている。これからどこへ向かうのだろう。抵抗、ストライキ、暗殺はあるだろうか。(略)社会民主主義者は、帝国議会の放火と結びつけられるのではないかという疑いに抗している。だれも、社会民主主義者がこれと関わったとは思っていない」。(2月28日)¹⁶まだこの時点で、カミル・ホフマンは、民衆にはファシズムへの不安と抵抗の意志があると見なし、期待と楽観が同居している。そして、3月3日の記述では、共産党、社会民主党へ弾圧が始まると同時に、ファシズムを喧伝しているのがラジオであると指摘し、新聞も含めたメディアからの重圧も尋常ではないことが分かる。「パニックは進行中。共産主義者、ならびに共産主義者とほとんど同等と見なされている社会民主主義者の追放は、数千人規模の逮捕となり、『マルクス主義』のすべての新聞の弾圧、左派政党のすべての集会の弾圧となっている。ラジオは、毎日、政府の演説を鳴らしている(略)それでも、ドイツにおけるファシズムの開始は頓挫した印象を受ける。というのは野党の抵抗が鈍く、消極的ではあるものの、強靱で打ち負かせるものではなく、とりわけ世界の論調はドイツに抵抗しているからだ。国会の放火は共産党員の犯罪であるとは信じられない。(略)恐れられているのはボグロム(暴力行為)だ。だが私は、そうなるとは心底信じていない。(略)3月5日、6日が過ぎれば、静寂となろう。

15 Ebd., S. 81f.

16 Ebd., S. 82.

レーニンの手紙、(略)カール・マルクスの遺稿を社会民主党の資料館から引き取らなくてはならない、(略)マストニーが理解してくれていたなら、私はそうしたのだが。彼はそうではなかった。(略)私はほとんどレーニンとマルクスの遺稿を家にもっていた」(3月3日)¹⁷暴力行為、逮捕は続いて、カミル・ホフマンはこの段階でもまだファシズムは続かない、頓挫すると信じているが、これはカミル・ホフマンに限ったことではなかった。

国会の選挙を勝利に導き、一党独裁、ナチス政権を盤石にするためには、3月5日の選挙結果がその後のナチスの行方を左右することになる。「昨日は選挙だった。ナチスの勝利だが、わずか43パーセントの得票率を獲得しただけであり、ドイツ国民党と合わせて52パーセントであった。これでドイツ民族の過半数がヒトラー内閣の後ろ盾となった。ヒトラーをドイツ国宰相に任命することは合法化された。国民社会主義(ナチス)のプロパガンダの集中砲火が功を奏したことになる。共産党員は一千万以上の票を失ったことになる。(略)ヒトラーの歴史的な勝利は明白。つまりドイツのプロイセン化。悲しい選挙の晩」。(3月6日)¹⁸この時点ではまだナチスは連立でようやく過半数を制するという状況であり、圧勝のなかでファシズム政権が突き進んでいるわけではなかった。

しかし選挙で信任をえたナチスの独裁政権であり、次の選挙で政治暴力、弾圧とともに勝利を導こうとする。3月15日の記述になると、ナチスの暴力、蛮行が続くなか、ドイツ人、チェコ人に限らず苦情を保護を求めて大使館にやって来る人が増えてくるにつれ、大使館の役割も大きくなる。ここにカミル・ホフマンのベルリンでの芸術家、作家の救済という役割が浮上してくる。キッシュの連行はその一例。「選挙に続いて勝利の祝賀が限りなく続いた。至る所に旗。SAが、まだナチス政権が支配していないあらゆる首都で占拠している(略)毎日、人びとが苦情と庇護を願ってやってくる。夜間のナチスによる住宅の来襲、家宅搜索、連行。ベルリンにはナチスのレストランが多くあり、人びとは連行され、みじめにも虐待を受けている。至る所、路上で事件が絶えない。(略)マストニーもチェコスロヴァキアの事例を報告した。E. E. キッシュは警察によって国境へ連れ去られた」。(3月15日)¹⁹状況は悪化の一途を辿り、ユダヤ人の商店、ユダヤ人自身のボイコットへと続く。「残虐の大騒ぎ」の責任はすべてユダヤ人にあるという論調が続いていく。「残虐行為に関する外国における報道を『拒否』するために、ナチスは全ドイツにおいてユダヤ人の商店、医者、弁護士のボイコットを宣言した。ナチスは、『残虐の大騒ぎ』の

17 Ebd., S. 82f.

18 Ebd., S. 84

19 Ebd., S. 84f

責任をユダヤ人に押し付けた。これは原始的なデマゴギーである。(略) 残虐行為の報道の80パーセントは真実である。ドイツにおけるユダヤ人は自らを人質として見なさなくてはならない。『残虐の大騒ぎ』が続けば、ユダヤ人は絶滅となるだろう。絶滅はゲーリングの大好きな言葉。ナチスの大好きな言葉でもある。(略) ボイコットは4月1日土曜日に始まる、という。(略) ラジオではボイコットへのナチスの訴えを喚きちらしている。全員がゲーリングのコピー、ヒステリックに大声で叫んでいる。(3月29日)²⁰「ユダヤ人の絶滅」を筆頭に大仰な言葉、過激な言葉、扇動する言葉を浴びせているのがラジオである、という指摘である。いよいよカミル・ホフマンにも焦燥感が迫り、事態の認識を求められる。一方で過半の民衆に対する期待と希みも窺える。民衆には扇動されることの恐ろしさと羞恥があると指摘する。「ユダヤ人をボイコット。ちえっ、いまましい。よく言われるが、これは中世だ。通りには多くの人間がユダヤ人の商店のまえでSAがプラカードをもって立っている。『ドイツ人よ、守れ、ユダヤ人のところで買わない』。(略) 扇動するナチス。民衆の過半数はともに行動はせず、羞恥心をもっていることが分かる」。(4月1日)²¹そしていよいよ、ヒトラーの誕生日、4月20日がやって来るが、この日の日記には最後に3行の記述があり、まだ状況は混沌としており、国外ではドイツ製品のボイコットが進んでいることが報告される。国外の状況分析も大使館の業務であり、情報の分析もカミル・ホフマンには任せられ、その分析力、判断力には信頼があった。「ドイツの国際政治の状況は悪化し、そのため新たな孤立が語られるほどである。(略) すべての国からドイツ製品のボイコットの話が聞かれる。ポーランドでは毎日、ドイツに対するデモがある。チェコスロヴァキアでは『民主主義の自衛のための措置』が告知された。(略) 今日はヒトラーの44回目の誕生日である。旗はなく、祝賀と演説。『われらがヒトラー』。ビスマルクには成功しなかったことが、ヒトラーは成功した」。(4月20日)²²カミル・ホフマンや他の芸術家、作家の楽観論の根拠になっているのが前述の海外でのドイツのボイコット、そしてドイツ国内でのヒトラーの演説の迫力のなさであった。「夕刻、ヒトラーは演説したが、彼のもっとも迫力のない演説のひとつであった、またもや古い家屋の修築、道路建設、労働奉仕の義務以外のことは言わず、ほとんどなにも肯定的なことは言わなかった」。(5月2日)²³カミル・ホフマンは海外でのドイツ包囲網が狭まってきていること、イギリスの反ドイツ感情の高まりを指摘し、とくに反ユダヤ主義を危険

20 Ebd., S. 88

21 Ebd., S. 88f.

22 Ebd., S. 91.

23 Ebd., S. 92.

思想であると断罪している。「毎日外国から聞こえてくるのは、ドイツ製品のボイコットである。ユダヤ人への報復宣伝はさらに成功しているが、(略)世界はドイツにおけるユダヤ人の追放に激昂し、とくにイギリスは穏やかではない。(略)ドイツの反ユダヤ主義はわれわれにはそれ自体、不快というだけでなく、全世界にとって容易に危険となりえる精神の傾向にも思えるのだ」。

(5月9日)²⁴

6週間のフランスでの休暇を終えて、カミル・ホフマンはベルリンでの職務にもどるが、国内の暴力行為、ユダヤ人商店のボイコットが進むと同時に、国際連盟からも離脱し、侵略戦争に突き進むことになる。「ベルリンにもどると状況は一変していた。(略)不満はあらゆる対話で表明された。しかし政権は揺るぎない。(略)ゲーリングに対抗するヒトラー、ゲッベルスに対抗するゲーリング。(略)国内では暴動を起こすナチスのために強制収容所ができた。さらに逮捕、虐待」。(9月30日)²⁵「1時から2時にかけて電話があり、ドイツが軍縮会議を離れ、国際連盟を離脱したとのこと。マストニーはジュネーブにいる、まだ知らないベネシュに電話をした。マストニーはこのことをまったく信じようとはしなかった。ドイツの高度な賭け。(略)さて、まだ国民投票と国家選挙がある。ヒトラーはつねに新しいプロパガンダを必要とし、みずから『人民に向け』、そして古い(略)国会を解散したが、それは有益なスローガンで(略)新しい、ナチスのみの国家を実現するためだ」。(10月14日)²⁶「昨日、ドイツの新政権の外交に関する国民投票、同時に国会選挙。結果は政権の敵が、投票の秘密が守られていないという噂によって脅えていることが明らかになった。投票率は90パーセント」。(11月13日)²⁷秘密選挙が守られず、SAの監視のもとに、だれがだれに投票したのか分かるように投票は行われた。カミル・ホフマンは、反対分子の排除に成功する、つまりナチス党以外の政党は認められないという事態を冷厳に見ている。

以上は、政治事件、選挙、ボイコット、暴行、連行などについて、カミル・ホフマンの見たまま、考えたままのことを紹介してきた。次にカミル・ホフマンの上司であったマストニーの対応、大使館の救済活動、大使館ならではのナチスとの関わり、ヒトラーとの交渉を中心に、時系列的に日記の記述を追ってみたい。「マストニー博士、昨日ライプツイヒのゲヴァントハウスでリヒャルト・ワーグナーの没後50年のパーティに出席。祝賀に出席していたヒトラーはマストニー

24 Ebd., S. 92f.

25 Ebd., S. 102.

26 Ebd., S. 105.

27 Ebd., S. 107.

にすぐ気づき、手を差し出した。『友好的』である」。(2月13日)²⁸このように外交官カミル・ホフマンにとって、ヒトラー、ナチス関係者との接触も可能であり、交渉の場として必要な相手であったことが分かる。²⁹「12日の日曜日からマストニーはプラハに滞在。私は彼の出発前に訪ねた、いくつか提案をプラハに転送するために。『日記』誌は、ここでは禁止され、チェコスロヴァキアに移動しようとしている。私は反対である、というのはここだと直ちに事態の説明が可能であるからだ、プラハで売られるにせよ。プラハのラジオ放送での30分のドイツ語放送枠は拡充されるべきであり、北ボヘミアで破壊的な効力がありそうなゲッベルスのプロパガンダに対抗して、ドイツ語による民主主義のための強力なプロパガンダを広げなくてはならない。ドイツの政治家、学者、作家、そして可能な限りユダヤ人ではない人が、毎日演説すべきである。プラハではこの必要性が理解されているだろうか。私はチェコの政党指導者、ジャーナリストに教えることを提案した、ここで与えられているのは、『国籍』の問題ではなく、国の利益の問題である。と。それから私は、マストニーに懇願した、(略)トロツキーの息子が一時的なヴィザしかもっていないので支援してほしいと。彼はもう何日も前から、自分の住居で寝ずに、動物のようにせかせかしている、他所の家の階段で宿泊している」。 (3月16日)³⁰この日の日記には、亡命雑誌の存亡、ズデーテン地方、北ボヘミアにおける反ナチス側のプロパガンダの必要性、急を極める弾圧、追放の状況が仔細に記述され、ナチス政権誕生後の選挙の結果を受けて事態が急変しているのが分かる。

「『ポツダムの日』。大軍事演習。帝国議会の開催、夕刻、松明の行進。一時過ぎまでSAが放歌しながら窓の下を過ぎていく。マストニーが私にプラハに行くように提案したが、それは報告のためであり、プラハでは政治難民の受け入れをどうしているかという疑問を明らかにするためだった」。 (3月21日)³¹「プラハのベネシュのところではほとんど2時間ドイツに関する質問に答える。ベネシュ曰く、『ヒトラーはこれからも信頼されることはないだろう』。ベネシュはヒトラー政権の継続期間を5年と見積もり、市民戦争になることを考えに入れている」。 (6月4日)³²ベネシュがヒトラー政権の見通しを楽観的に予想していたことが、この記述から窺えるが、これは後述するように彼自身の見通しの甘さ、特性からくるものだろう。

28 Ebd., S. 78.

29 Pavel Polák: Camill Hoffmann. Eine Biographie, Praha, 2006, S. 35.

30 Ebd., S. 78.

31 Ebd., S. 87.

32 Ebd., S. 95.

大使とナチスとの接触は以下のように記されている。「昨日の午後、ホテル・アードロンでナチスの外務省によるパーティ。ローゼンベルクがスピーチをする。かれは国民社会主義（ナチス）の『理解』を求めて宣伝した」。(6月24日)³³「昨日、マストニーが再びベルリン。ベネシュが彼に通達したのは、大統領は来年立候補を辞めるということ。国内政治で、来年の大統領選挙が影を投げかけ始めている。(略)マストニーはこの関係において大いなる楽観主義に警告を発している」。(6月30日)³⁴マストニーとナチスとの接触も保たれており、厳密なやりとりがなされ、突き詰めた交渉がつねに行われる環境にあったことを次の記述は物語っている。「今日、マストニー、アドルフ・ヒトラーのところに。(略)マストニーはチェコスロヴァキア人への追及にかんする異議から始めた。246件。ヒトラーは、『残念ながら』暴力のケースはあることは認めた、またマストニーがチェコ人に対してではなく、ユダヤ人に対する暴力について語った内容を認めた。ユダヤ人問題にもどる。(略)マストニーは、(略)ユダヤ人のボイコットでは行き過ぎた点が出ており、高度なドイツ文化には相応しくない、と答えた。ヒトラー曰く、そのとおりだったろう、これほどの革命では(略)若干の暴力行為があり、共産主義からの救済であった、と。マストニーは反論してこう言った、共産主義者、社会民主主義者、国境を越えて逃亡しているユダヤ人の追放によってチェコスロヴァキアがいかに苦悩しているか、またチェコスロヴァキアにおけるさまざまな国籍の者が共生するには民主的な政権下でのみ可能であると。(7月14日)³⁵

だが、一方でカミル・ホフマンは、マストニーがベネシュの外交における優柔不断さ、一貫性のなさを見抜いていたことを認識しながら、外交官としてありのままを見るという傍観の立場をとった。ゼルケはこの事情を次のように述べる。「マストニーはベルリンからマサリクの後継者の手抜きをみていた。つまり後継者は一九三七年になってようやく——展望のない状況で——ズデーテン・ドイツ人に、マサリクが一九一九年にパリ講和会議で約束したことを実行する準備をした。その状況でカミル・ホフマンは観察者の立場、目撃者の立場に身をひいた。ドイツ語を用いるチェコのユダヤ人は、外交上の治外法権によって、反ユダヤ主義者によるドイツ系ユダヤ人の追放から守られ、ドイツ系ユダヤ人の追放がある段階に達するのを見ていた」。³⁶この指摘は、なぜカミル・ホフマンがプラハに退き、亡命しなかったのか、という疑問の答えとなるかもしれ

33 Ebd., S. 98.

34 Ebd., S. 99.

35 Ebd., S. 100f.

36 Jürgen Serke, ebd., S. 202.

ない。つまり、治外法権によって立場は最後まで守られてきたカミル・ホフマンは、プラハに退き年金生活を送ることになっても身の危険は回避されるだろう、と考えたのではないか。

チェコスロヴァキア大使館の役割、とりわけ広報担当官であったカミル・ホフマンの文学者、芸術家との接触、関わりは頻繁にあり、そのことが救済活動に通じ、ドイツ・チェコスロヴァキアの文化を共生させ、通底させるというカミル・ホフマンの理念の実践となった、と言えよう。「ハインリヒ・マンは、今日プロイセンのアカデミーの作家部門の会長を辞するように強要された人物である。というのは彼は、ヒトラー政権はわずか半年しかもたない、もしくは長くはもたないと信じているからだ。彼はこう言う、『第二共和国が誕生するならば、新しいアカデミーをつくろうではないか。愛国主義者はそのなかには入れない』。(2月20日)³⁷「警察とSAはどうやらすでに一体化しているようだ。恐怖となっているのは、ゲーリングの撃ち合いであり、彼の演説だ。『発射された弾は私が発射したものだ』。(略)ハインリヒ・マンはリヴィエラにいる。トーマス・マンはパリだ。アルフレート・ケアはプラハだ。彼らは、野蛮なナチから野卑な言葉を浴びせられるつもりはない。ドイツではじつに、殺人の空気が漂っている。(2月27日)³⁸1933年1月30日のナチス政権誕生の際に、反ファシズムの作家、芸術家の政権に対する評価は、前述のような早期退陣、早晩の崩壊を予測する楽観論者とやむなく、パリ、ロンドン、リスボン、そしてアメリカへと亡命を決意する脱出組とに二分された。「フィアテルが昼間きた。彼はプラハに夕方、旅立つときめた。それに反しケアはパリにいる。シュタンパーが逮捕される、(略)ヴィクトーア・シッフが逮捕される」。(3月3日)³⁹「『残虐行為の報道』は弱まり、ユダヤ人のボイコットが前面に出ている。(略)一貫したユダヤ人の追放が、世界を悩ませている。アインシュタインは、ドイツ帰国を諦め、ドイツ国籍を捨てた(略)ヴィルヘルム・フルトヴェングラーはゲッベルスに手紙を出し、手紙のなかで『よい芸術と悪い芸術』に区別されることだけは分かっており、ほかのすべての政治を拒否します、と書いている。荒野の声であり、唯一の声。すべてが『画一』『化』していく」。(4月13日)⁴⁰「昨日、アルノルト・シェーンベルクが私のところに来る。彼も釈放され、チェコスロヴァキアのパスポートを取ろうとしている」。(4月20日)⁴¹ここに記されている、公使としてのカミル・ホフマンには多くの芸術家、作家を海外脱出へ

37 Camill Hoffmann: Politisches Tagebuch 1932-1939, S. 80.

38 Ebd., S. 81.

39 Ebd., S. 83.

40 Ebd., S. 89.

41 Ebd., S. 90.

と導く役割があり、とくにチェコスロヴァキア経由でロンドン、ニューヨークへと脱出していく亡命作家にとって、とりわけパスポートの入手は緊急の課題であった。

Ⅲ. 終わりに

以上見てきたように、第一次チェコスロヴァキア共和国にあって、カミル・ホフマンは両国の協調、共和を願い、多民族共生の精神を具体化しようとした作家であり、ドイツ語、チェコ語を完全に運用できるチェコスロヴァキアの民主主義者であった。『政治日記』はチェコスロヴァキア的外交官として、ヴァイマル共和国の破綻からミュンヘン協定を経てチェコスロヴァキアの占領までの激動の30年代を活写したベルリンの政治ドキュメントである。それと同時に、作家、詩人としてベルリンから、多くの亡命作家の実態を克明に記録した日記でもある。またこの『政治日記』はチェコ語訳⁴²が2006年に刊行されたところであり、カミル・ホフマンの発掘、再評価につながる出版となり、外交官から見たベルリンの30年代におけるチェコスロヴァキアとドイツ第三帝国の外交史の貴重な記録となっている。このことからプラハのドイツ語作家を「三重のゲッター」から解放し、個々のデータを積み重ね、作家の実情を時代状況のなかで再構成していく作業が求められよう。

42 Camill Hoffmann: Politický deník 1932-1939, Praha, 2006.

